

第9章 岩内・小樽の有名人

伊藤良因

9.1 木田金次郎について

9.1.1 経歴

北海道洋画壇を代表する作家の一人である。1893年岩内に生まれ、漁業を続けながらも、絵画への情熱を育み、有島武郎との運命的な出会いにより、その生涯を岩内で過ごし、絵筆を握ることを決心する。

やがて有島が、木田青年との交流を小説にし、『生れ出づる悩み』として出版すると、そのモデル画家として知られるようになる。有島の激励を受けながら、厳しい漁師生活のなかで岩内周辺の自然を描き続け、有島武郎の没後、家業である漁業を捨て画家に専念することにした。

1954年岩内大火（市街地の8割を焼失）により、それまでの作品約1500点余を焼失したが、その後、精力的な創作を続け、生涯、故郷岩内を離れることなく、独自の画境を切り開く。1962年脳出血により逝去、享年69歳であった。

図 9-1 木田金次郎



出所:木田金次郎記念館 HP

9.1.2 交流

9.1.2.1 有島武郎

東京小石川（現・文京区）に旧薩摩藩士で大蔵官僚の有島武の子として生まれる。横浜に移り、4歳から横浜英和学校（現・横浜英和学院）に通う。このころの体験が後に童話『一房の葡萄』を生むことになる。10歳で学習院予備科に入学し、19歳で学習院中等全科を卒業した。その後、札幌農学校に入学する。内村鑑三や森本厚吉の影響などもあり、1901年にキリスト教に入信する。農業学校卒業後に軍隊生活を送り、その後渡米した。ハバフォード大学大学院、さらにハーバード大学で学び、社会主義に傾倒しホイットマンやイプセンらの西欧文学、ベルクソン、ニーチェなどの西洋哲学の影響を受ける。さらにヨーロッパにも渡り、1907年に帰国する。このころ信仰への疑問を持ち、キリスト教から離れる。

図 9-2 有島武郎



出所:今日の出来事ロジー

帰国後はふたたび予備見習士官や東北帝国大学農科大学の英語講師として過ごしていたが、弟の生馬を通じて志賀直哉、武者小路実篤らと出会い同人誌『白樺』に参加した。『かかん虫』『お末の死』などを発表し、白樺派の中心人物の一人として小説や評論で活躍した。1916年に妻と父を亡くすと、本格的に作家生活に入り、『カインの末裔』『生まれ出づる悩み』『迷路』を書き、1919年には『或る女』を発表した。しかし創作力に衰えが見え始め、『星座』を途中で筆を絶つ。1922年、『宣言一つ』を発表し、北海道狩太村の有島農場を開放し話題を呼ぶ。その後1923年痴情の纏れからある女性と心中を図る。享年45歳であった。

9.2 夏目漱石について

9.2.1 経歴

夏目漱石（本名・夏目金之助）は、1867年、江戸牛込馬場下横町（現・新宿区喜久井町）に生まれた。幼くして養子に出された。

東京帝国大学卒業後、松山中学校、熊本第五高等学校などで英語を教える。1900年から1902年まで、英国へ留学する。

帰国後、東京帝国大学などで教鞭を取るが、1905年「ホトトギス」に『吾輩は猫である』を連載し、1907年には教職を辞し朝日新聞社に入社する。以後、朝日新聞に『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』『道草』『明暗』などを連載する。

1916年12月9日、胃潰瘍のため死去した。

図 9-3 夏目漱石



出所: 夏目漱石ライブラリ

9.2.2 岩内町と夏目漱石

夏目漱石といえば前述の通り執筆活動で有名である。そして旧1000円札の肖像画としても多くの人から認知されている。彼にゆかりがある地として岩内町がしばしば挙げられるが、彼は岩内町にて生活していたということはない。つまり、籍だけ存在していたのである。その理由として、本人は「極北日本」内で「妙な関係から」とだけ述べており、詳細は不明である。転籍したのが大学卒業にあわせた時期であり、以下の事が推測されている。

当時国内では徴兵制が敷かれていた。25歳の学生のため徴兵を猶予されていたが、卒業後徴兵される可能性があった。そこで当時免除地域だった北海道に籍を移転させることで免れようとした、というのが有力な説である。

当時北海道は屯田兵が置かれており、開拓に集中していたこともあり、人口もわずかであった。そのため道内に戸籍を置く者が兵役免除になっていた。1889年1月に函館・江差・

松前（福山）、1896年1月に渡島・後志・胆振・石狩で徴兵令が出されるようになり、屯田兵募集停止が迫る1898年1月に全道に徴兵令が敷かれるようになったが、それまでは免除であった。

こうした時代背景から、本州の人でも兵役逃れのため日高、網走など道内各地に籍を移していたことがさまざまな資料から判明している。22年たって籍を東京に移すも、その後まもなく亡くなっているため、人生の半分弱は岩内にいたことになっているのである。

9.3 石原裕次郎について

9.3.1 経歴

1934年12月28日兵庫県神戸市に生まれる。幼少期を北海道小樽市で過ごす。

父は汽船会社重役であり、慶応高校時代はバスケットに熱中した。

1956年、兄・慎太郎の芥川受賞作の映画化『太陽の季節』に脇役として出演した。慶大を中退して日活に入社し、『狂った果実』で主演デビューを果たし、またたくまに銀幕の大スターとなる。

1963年石原プロモーションを設立して映画制作にも挑戦し、第1回作品『太平洋ひとりぼっち』は第18回芸術祭賞を受賞した。

1970年代に入ると活躍の舞台をテレビに移し、「太陽にほえろ!」「西部警察」で頼れる”ボス”と、幅広い世代に支持される。

同時に歌手としても500曲以上を吹き込み、「銀座の恋の物語」「ブランデーグラス」などのヒット作を生み出した。

1987年7月17日、死去した。

石原裕次郎は歌手活動の中で多くのレコードを世に出している。この中には幼少期を過ごした小樽にまつわる『おれの小樽』という作品もある。

図 9-4 石原裕次郎



出所:石原プロモーション

図 9-5 『おれの小樽』



出所:石原裕次郎専科

9.4 小林多喜二について

9.4.1 経歴

1903年秋田県の貧しい農家に生まれた小林多喜二は4歳のころに伯父を頼り小樽に家族とともに移住した。小樽で青年期までをすごした。伯父のもとで住み込みで働き、学費などを伯父から援助されながら小樽商業学校に通い、さらには小樽高等商業学校（現・小樽商科大）へと進学した。このころから創作活動は行っており、文芸誌へ投稿などの活動をしていた。卒業後は北海道拓殖銀行に勤務し、ごく普通の生活を送っていた。同人誌『クラルテ』を発行しながら文芸活動も継続していた。その中で、志賀直哉、ゴーリキー、葉山嘉樹などに傾倒し資本主義国家における社会問題に関心を寄せるようになる。

そして、1928年全日本無産者芸術連盟の機関誌『戦旗』に発表した「3.15事件」で検挙拷問された小樽の労働者の群像を描いた『1928年3月15日』で一躍脚光浴び、続けて、厳しい労働条件に苦しむ蟹工船の労働者たちが、団結して闘争に立ち上がるという筋書きの、後年、プロレタリア文学の代表的作品と評価された『蟹工船』、『不在地主』の力作を発表した。左翼文学の最前衛となったが、拓銀を依願退職という形で解雇された。1930年に上京、『工場細胞』を発表した直後に逮捕され、労農党代議士山本宣治が命をかけて反対した治安維持法（旧法）違反容疑で5か月間収監された。1931年出獄後『オルグ』『独房』『安子』などで文学運動の先陣にたち、日本プロレタリア作家同盟書記長となった。1931年当時非合法下にあった日本共産党に入党、以後、プロレタリア文学の若き旗手として活躍した。日本共産党に入党後は日本プロレタリア文化連盟の結成に尽力、1932年春には、非合法の地下活動に入り、文化団体の共産党グループ責任者として『右翼的偏向の諸問題』など多くの評論を書き、大作『転形期の人々』に取り組んだ。

1933年2月20日、スパイの手引きで街頭において治安維持法違反容疑で逮捕され、東京・築地警察署に留置されるが、転向を拒否したため、特高警察の拷問でその日のうちに虐殺され、29歳と4か月という短い生涯を終えた。彼の墓は南小樽に存在している。そして彼の蔵書は小樽商科大学内の図書館に寄贈されている。

図 9-6 小林多喜二



出所:小林多喜二の生涯

参照 HP

- ・石原裕次郎専科

<http://www.geocities.jp/cyannyuu/>

- ・石原プロモーション HP

<http://www.ishihara-pro.co.jp/index.html>

- ・木田金次郎美術館

<http://www.kidakinjiro.com/>

- ・今日の出来ごとロジー

<http://blogs.yahoo.co.jp/p/myblog/mytop?bid=sw21akira>

- ・小林多喜二の生涯

<http://kajipon.sakura.ne.jp/kt/takiji.html>

- ・小林多喜二

<http://tamutamu2011.kuronowish.com/kobayasitakiji.htm>

- ・東北大学附属図書館 夏目漱石ライブラリ

<http://www.library.tohoku.ac.jp/collect/soseki/index.html>

- ・Pucchi Net

<http://pucchi.net/>